



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2010.1 第38号



提◆言

今使っている薬、本当に必要ですか

日本SPF豚協会認定委員
株式会社サンエスブリーディング

名越 仁宣

新年明けましておめでとうございます。

昨年は厳しい経済状況の中、豚価も低迷し、養豚経営においても大変な1年となりました。なかなか明るい兆しはみえませんが、一日も早い景気回復を期待したいところです。

さて、どこの農場でもさまざまな動物用医薬品を使用していると思いますが、その中には結構むだになっている薬品、とくに必要でもないのについ習慣として使ってしまった薬品というものがあるのではないのでしょうか。

CM農場においてSPF豚認定農場としての可否を判断する基準の中に、4項目から算出する農場生産指数があります。項目の一つとして「出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費」(A薬品)があります。A薬品とは、おもに抗菌性物質、駆虫薬、解熱剤(消炎・鎮痛剤を含む)などですが、7年前の認定規則改訂で生産指数を算出するようになってから、この金額が生産成績において大きなウエイトを占めるようになりました。

このA薬品を大幅に削減しつつ、他の生産成績が改善された農場例をあげてみます。

まず、A農場では、昨年度までA薬品が300円を超えていましたが、今年度は116円と約3分の1に減少しました。一方で、1母豚あたりの年間肉豚出荷頭数は昨年度まで21頭台だったのが今年度は22頭を超え、農場飼料要求率も初めて3.2を切りました。薬品費が大幅に減少した要因は、おもに下痢予防目的で使用していた飼料添加薬をやめたことです。その結果、臨床的に豚の健康状態が悪くなることはなかったようです。

また、B農場では、昨年度の約200円から69円と、同

様に約3分の1となりました。年間肉豚出荷頭数は20頭弱ですが、昨年度までに比べると3%ほど増加しています。この農場では、肺炎および下痢症の予防のために使用していた飼料添加薬が大幅に削減されました。これは完全使用中止ではなく、豚舎移動時に数日間だけ使用し、投薬期間を短縮しました。この方法でも豚の健康状態は特に変わりはないとのことでした。

この2農場では、疾病予防の目的で飼料添加薬剤を使用していましたが、それを中止したり投薬期間を短縮することで疾病などの悪影響が出るのではと危惧したようです。しかし、それは杞憂に過ぎませんでした。薬に頼るのではなく、密飼いの解消、適切なピッグフロー、豚舎移動後の保温、換気、空き豚房の徹底洗浄と消毒、群の編成がえを最小限にとどめるといった、飼養管理面の改善が効果的だったのだと思われます。

豚の健康状態を維持するために医薬品が必要な場面ももちろんありますが、本当に有効なのかどうか正しい判断が必要となります。薬剤感受性試験結果と臨床効果が必ずしも一致するわけではありません。吸収性、体内分布が異なることから、試験ではよく効いているのに実際に使用してみると特に効果が得られないという経験も多いと思います。また、使用禁止期間および休薬期間を順守するのは当然ですが、投与量や投与期間にも注意を払わなければ、副作用や耐性という問題が生じる場合もあります。

長年使用した薬品をやめるのはなかなか勇気がいることですが、果して本当に必要な薬品なのかどうか見直すことは、現在の厳しい農場経営において重要な課題ではないでしょうか。

協会設立40周年記念セミナーを開催

記念表彰はじめパネルディスカッションや講演、農場表彰 先進事例紹介など多彩に

協会では昨年11月12日、横浜市の情報文化センターホールにおいて、協会設立40周年記念セミナーを開催いたしました。懇親会と合わせ延べ155名の参加をいただき、記念セミナーにふさわしい盛況ぶりでした。その概略をかいつまんでご紹介します。

◆記念式典◆



「SPF養豚システムは信頼のおける生産技術」と祝辞を述べられた、村上洋介・動物衛生研究所所長

北島克好協会副会長の総合司会のもと、赤池洋二協会会長の挨拶に続き、動物衛生研究所の村上洋介所長より祝辞をいただきました。

続いて、長年にわたりSPF養豚に従事し、協会の事業推進に多大な貢献をされた4名の方に対し、会長より賞状と記念品が授与されました。受賞者は下記のとおりです。

●協会特別功労賞 林 栄氏（千葉県・(株)林商店）

●SPF豚功労賞

小田島健夫氏（岩手県・(有)ケイアイファウム）

平 芳紘氏（長崎県・(有)芳寿牧場）

日浅 文男氏（北海道・(有)道南アグロ）

受賞者を代表し、林さんより謝辞がありました。

◆記念パネルディスカッション◆

「協会40年のあゆみとこれから」と題し、赤池会長とSPF豚功労賞を受賞されたお三方をパネリストに、吉田修作・協会顧問の軽妙な司会で開始されました。

司会「SPF豚に取り組んだ動機は？」

小田島さん「外部導入豚からの疾病侵入に悩まされ続けた。成績を安定化させるためには、清浄化が必要不可欠だと思った。さらに、自家更新では育種改良が思うに任せず、種豚生産コスト面からも継続は困難と判断した。そこで、GP農場から種豚を導入することとした」。

平さん「母豚30頭の一貫経営でスタートしたが、当時大量投



薬しないと成績を維持することが困難だった。こんなに投薬してよいのか。子供たちに安心して食べさせられ、地域の人に喜ばれる豚肉生産でなければいけないとの意を強くした。そこで母豚200頭のSPF豚農場に変換した」。

日浅さん「初めて食べたSPFポークが、臭みがなく、美味しい豚肉というイメージを私に植え付けた。トータルアグリビジネスの取り組みを考えていたので、豚肉生産はSPF豚でという構想が固まった」。

司会「実際にSPF豚経営に取り組まれて苦労したことも多かったのでは？」

小田島さん「これまで紆余曲折があったが、それを一つ一つバネにして今日まで来た。都心に蛋白源を供給することを第一目標として、資質の改善を目指した。そのため東京食肉市場に出荷し、忌憚のない評価を受けるようにした。東京食肉市場は資質の評価情報が早く、資質改善には適している。また、地元取引は、セット販売だけとし、小売店にも全部位を売り切るよう販売努力をしてもらっている」。

平さん「規模拡大が自分の大目標であった。母豚30頭から1,000頭へ、道のりは長かったが、やっとたどり着きつつある。とにかく金がなかったので、豚舎建設用地もブルドーザーを自分で運転しミカン畑を造成、造成・建設費用を大幅に圧縮することに注力した。また、差別化販売できるSPFポーク生産を目指した。販売も地元食肉業者にSPFポークの良さを理解してもらい、差別化豚肉として扱ってもらっている。その価値を維持するため『一番と殺、一番カット』体制を実行している」。



協会特別功労賞を受け挨拶する林 栄さん（左上）
S P F 豚功労賞を受賞された小田島健夫さん（右上）、平 芳紘さん（左下）、
日浅文男さん（右下）の3氏

日浅さん「何もかも初めてのことで、戸惑ったというよりこのまま続けられるのか不安ばかりだった。豚扱いは想像以上に大変だった。しかし、生産から販売までのシステム構築、循環型農業は自分の夢であり何としてもやり遂げたいという強い気持ちは持ち続けた」。

司会「このような苦労をされた皆さんだからこそ、協会に要望されることも多々あることと思いませんか？」

小田島さん「販売に寄与する、S P F ポークの宣伝・啓蒙の強化をしてほしい」。

平さん「S P F ポークの良さを消費者に伝えシェア拡大をして欲しい。また、生産農場の拡大を進めてほしい」。

日浅さん「認定制度をアピールし、いかに真面目な生産者軍団かを知らしめてほしい。農場経営年数が経過すると農場汚染が進行する。この対策はどうすればいいのか？ 疾病に関するいち早い情報キャッチと情報伝達を中心になって欲しい。国産豚肉の中でも、S P F ポークが燦然と輝くような位置付けになってほしい」。

赤池会長「会員拡大を次期目標の一つとしたい。また、協会が力強く前進できるよう、皆さんの一層の協力をお願いしたい」。

司会「最後に、これからの取り組みについて」

小田島さん「消費者に支持される豚肉作りを目指す。岩中ポークシールが、都内で10万枚出回るようにしたい」。

平さん「地元で喜ばれる豚肉作りを目指す。芳寿牧場をいかにして、後へつなぐかが私の仕事になる」。

日浅さん

「薬・ワクチンを使わない豚肉作りを目指す。化学肥料ではなく有機物肥料で生産

する野菜と組み合わせた、循環型農業を実現させたい」。

お三方の力強い発言に、会場の皆さんも意を強くされたようでした。また、会場の参加者からも「グレードの高い、ステータスの高い豚肉を作っていることを声高に、宣伝してもよいのではないかと、嬉しい応援メッセージがありました」。



パネルディスカッション。左から司会の吉田さん、赤池会長、小田島さん、平さん、日浅さん

◆S P F 豚農場の生産成績◆

昼食をはさんで、午後からはセミナーの部となりました。

まず、藤田世秀協会事務局長より次のような認定農場生産成績の年次報告がありました。

「S P F 豚農場認定評価基準に生産成績が生産指標として加味されるようになって5年。この5年間の推移を分析してみると、全体として、横ばいである。ただし、農場飼料要求率は年々悪化の傾向にある。さらに、生産指数の良い順番に認定農場を4ランクに分け、その傾向を分析しているが、Aランク（生産指数上位25%の農場）は毎年生産指数が上昇している。その主因は1母豚あたり年間肉豚出荷頭数の上昇と、農場飼料要求率の改善である。B、C、Dランクの農場は農場飼料要求率がわずかながら悪化する傾向にある」。

出荷肉豚1頭あたりのA分類薬品費（主に抗菌性物質）は200円をわずかに下回り、横ばいとみてよい。全国的に抗菌性物質使用が増加する中、S P F 養豚の優位性を発揮していると考えられる。ただし、Dランクにおいて基準値である286円を超えていることは気掛かりである」。

◆講演◆

続いて、「養豚生産者自らの団体を」と題し、(社)日本養豚協会副会長で(財)畜産環境整備機構副理事長である

南波利昭氏による講演がありました。

南波氏は講演の中で「現在、養豚関係者団体は平成10年に全国養豚協会と日本種豚登録協会が統合した『日本養豚協会』と、平成18年に発足した



南波利昭・(社)日本養豚協会副会長

『日本養豚生産者協議会』がある。平成20年3月に両団体の統合の検討が始まった。検討委員会において5回検討を行ったが、組織一本化の合意にはいたらなかった。その後、組織統合推進委員会と改称し検討を重ね、両団体の理事会および総会において組織一本化の了承を得た。そこで組織統合準備委員会と改称、本格的な作業に入った」。

「新組織は一般社団法人とする。中央では両団体を統合し、一つの団体とする。県組織では原則的に一県一組織とするが、当面の間複数の県組織を認める。会費(養豚振興協力金)は年間母豚1頭あたり200円(肥育豚1頭あたり10円)、県組織を形成している団体には、うち50円(同2.5円)を地方組織育成費として還元する。平成22年4月の統合を目指し、関係団体への説明会、ブロック会議等々実行中である」などと述べられました。

◆生産成績最優秀農場表彰◆



青木賢一・青木ビッグファーム代表

3回目となった最優秀CM農場の表彰、今回は総合生産成績、商品化頭数とも北海道の青木ビッグファームが受賞しました。

代表の青木賢一さんはこの日、この表彰のためだけにわざわざ清水町から駆け付け次のようにスピーチして下さいました。

「今、多くの人に対する感謝の気持ちで一杯です。私は、養豚とは、よい豚を、より多く、より効率的に生産することだと思っています。生きて生まれてきた豚はすべて出荷したい。そのためには、手を使い、足を使い、頭を使って、やるべき事をすぐやり、その日の仕事はその日のうちに終わらせるという、確たる想いで、仕

事に取り組みます。もっとやるのが、やれることがあるのではないかといつも思います。

豚は私の五感を鍛えてくれます。豚を見る目、豚の啼き声を聞く耳、臭いを感じる鼻、舎内空気の状態を感じる肌。どれも、4年前よりも、鍛錬されたと感じます。最近、周りからは『豚バカ』と言われるようになりました。私にとって、こんな嬉しい褒め言葉はありません。もっと上を目指したいと思います」。

青木さんは母豚150頭をほぼ一人で管理されています。朝4時から作業を開始するとのお話ですが、それがなぜできるのかが垣間見えた、想いの伝わるスピーチでした。

◆先進的SPF豚農場紹介◆

最後に、(農)八幡平ファーム(岩手県)の大泉俊昭常務理事より、農場紹介の講演がありました。

突然、会場内に「元気ですか!」の大声。何事?会場内も一瞬静寂。それが大泉常務の第一声



大泉俊昭・(農)八幡平ファーム常務理事

でした。アントニオ猪木のフレーズで受けを狙ったものの、見事空振り。しかし、元気は伝わりました。八幡平ファームは元気が一番なのです。

従業員1人で母豚100頭を管理できる養豚を目指して、現在17人で1,630頭の母豚を管理しています。成績を見てみると、分娩率93.6%、1母豚あたり年間肉豚出荷頭数25.0頭、農場飼料要求率3.05(肉豚飼料要求率は2.64)、出荷日令は160.2日、枝肉重量は72.7kg(出荷体重110.9kg)、上物率65.3%、背脂肪厚1.77cm、枝肉適合率(70~78kg)91.5%、薄脂格落率10%、被覆格落率6%というすばらしいものです。

阿部日出夫組合長以下経営陣の、社員活性化に注ぐ力は並々ならぬもの。このモチベーションの高さを維持し続けるかぎり、好成績を維持できると確信しました。この講演内容については、今後本誌で随時ご紹介する予定です。

講師、表彰者の方々、ご出席いただいた皆さま、お忙しい中、ありがとうございました。

豚萎縮性鼻炎①

東京農業大学教授 山本 孝史

豚萎縮性鼻炎 (atrophic rhinitis以下AR) は、マイコプラズマ肺炎、胸膜肺炎と並んで豚の3大呼吸器病とされています。

病因: 本病の起因菌は、*Bordetella bronchiseptica* (*Bb*)および毒素産生性の*Pasteurella multocida* (*Pm*)です。*Pm*が関与すると重篤な病変を形成することが多いことから、特に「進行性萎縮性鼻炎 progressive atrophic rhinitis」(以下PAR)と呼ばれます。鼻甲介の萎縮に関与するのは、両菌とも毒素です。しかし*Bb*の毒素(皮膚壊死毒素)は豚から分離される菌株のほとんどが産生するのに対して、*Pm*の毒素は、一部の菌株によってしか産生されません。したがって、*Bb*が分離されれば、それは農場内にARが浸潤しているということを意味しますが、*Pm*が分離されたからといって即ARと考えるのは誤りです。*Pm*は豚の上部気道の常在菌であり、そのうち毒素を産生する菌株だけがPARに関与するからです。欧州、特にオランダやドイツでは*Pm*によるPARが問題視され*Bb*は軽視される傾向があります。しかしわが国では、*Bb*ワクチンの普及とともにARによる被害が沈静化していったことから明らかなように、*Pm*によるPARは、これまで大きな問題とはなっていません。また実験的に*Pm*の毒素を投与するとPARが再現されますが、*Pm*そのものを接種してもPARは再現されず、鼻粘膜をあらかじめ酢酸のような化学物質で損傷しておいたり、*Bb*を同時に感染させる等の措置を講じなければなりません。これは、*Pm*単独では気道に定着しにくいとされています。従って野外でPARが*Pm*単独で起こる頻度は高くなく、*Bb*も関与していることが多いと考えられます。実際、筆者がこれまで経験したARの野外例のうち、PARといえる重篤な発生例で*Bb*が関与していなかった例はありません。したがって、ARの対策は*Bb*を主体に実施するのが得策です。

その他の要因: かつてARは、飼料中のカルシウムとリンの比率(Ca/P比)のアンバランスにより発症するという説がとねえられたことがあり、そのため*Bb*を病因とする説が有力になってからは伝染性萎縮性鼻炎と呼ばれていました。すなわちCa/P比のアンバランスによる

ARではなく、*Bb*によるARと限定していたのです。現在ではARの病因は既述のように*Bb*と毒産生性*Pm*であることが確定しており、配合飼料を給与する限り、Ca/P比のアンバランスを気にかけることはありません。しかし今後エコフィード等の普及に際しては、配慮すべき事柄です。

一般に環境や飼養管理により呼吸器病の症状が左右されることはよく知られており、ARに限ったことではありませんが、ARに関しては、臨床観察による調査から、粉餌やほこりっぽい環境が症状を悪化させるとされています。実験的にこの問題を扱った一例をあげますと、Hamiltonら(1999)は、卵白アルブミンから作製した有機物のホコリ(1m³の空気当たり20mg)やアンモニアガス(50ppm)あるいは両者の存在下では、萎縮性鼻炎の病変が増悪されるという実験結果を報告しています。しかし一方、Andreasenら(2001)は、50および100ppmのアンモニア存在下でも萎縮性鼻炎の病変の程度は増悪されなかったとしており、まちまちの結果となっています。これらの実験におけるアンモニア濃度やホコリの量は、通常の養豚場における量に比べて著しく高いことから、ホコリやアンモニアの影響をあまり神経質に考える必要はなく、むしろ*Bb*や*Pm*をいかに抑え込むかに集中すべきだというのが筆者の考えです(以下次号)。

<参考文献>

Andreasen, M. et al. (2001): Lack of effect of aerial ammonia on atrophic rhinitis and pneumonia induced by *Mycoplasma hyopneumoniae* and toxigenic *Pasteurella multocida*. J. Vet. Med. B., 47, 161-171.

Hamilton, T. D. C. et al. (1999): Contributory and exacerbating gaseous ammonia and organic dust in the etiology of atrophic rhinitis. Clin. Diagn. Lab. Immun., 6, 199-203.



罹患豚のアイパッチと鼻出血

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

SPFポーク試食に長蛇の列、アンケートも実施 ちくさんフードフェア、協会ブースが大人気

協会では、昨年10月10日（土）、11日（日）の2日間、神奈川県川崎市東扇島の(財)日本食肉流通センター内で開催された「ちくさんフードフェア」（川崎みなと祭り
と同時開催）に初めて出展しました。

今年のフェアは好天に恵まれ、川崎みなと祭りとの連携強化や、「おいしさいっぱい和牛まつり」や「元気いっぱい豚肉まつり」などのイベントが盛り上がりを見せ、昨年を上回る9万5,000人の来場がありました。

協会は畜産関係団体コーナーで、SPFポークの試食（しゃぶしゃぶ、道南アグロ提供の生ハム、レクスト提供のもも炭火焼きの3種類）、パネル展示、アンケートの実施、協会オリジナルTシャツが当たる抽選会などを実施しました。

両日とも予想をはるかに上回る好評ぶりで、協会ブース前には長蛇の列ができ、スタッフは対応に追われました。準備したSPFポーク（約55kg）は、時間を区切った試食会にもかかわらず、11日午後3時ですべ

て試食完了となりました。

また、アンケートは1924枚回収、集計の結果、3割程度を予想していたSPFポークの知名度が、意外にも6割を超えていました。とはいえ、「知っている」と答えた人の

中で「食べたことがない」という人も3割弱いることから、情報提供の工夫が必要と痛感しました。



協会ブース前には試食を待つ長蛇の列が（上）
試食後アンケートに答える来場者（下）

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

認定農場・多田ファーム（愛媛県大洲市）が 畜産経営管理技術発表会で優秀賞を受賞

昨年11月2日に開催された平成21年度全国優良畜産経営管理技術発表会（主催：(社)中央畜産会、(社)全国肉用牛振興基金協会）において、認定農場である愛媛県大洲市の(株)多田ファームが、優秀賞に当たる中央畜産会長賞と農林水産省生産局長賞を受賞されました。

この発表会は優秀な実績を取めたり、特色ある取り組みを行って成果を上げている畜産経営を全国から選出し、表彰するものです。

多田ファームは平成12年、8戸の養豚農家を母体とし、会社組織化された大規模一貫経営農場です。平成14年から協会認定を取得しています。適材適所による分業化のメリットを生かし、繁殖母豚1,000頭と大規模ながら母豚1頭当たりの肉豚出荷頭数など県内でもトップクラスの成績を取め、高い技術を持ちます。その背景に

はTKCソフトを用いた経営管理、全農Web P I C Sを用いた技術管理、SPF農場としての維持・管理

といった生産努力があります。また、マーケティング面でも、量販店において多田ファーム独自の銘柄豚で精肉販売している点などが評価されました。表彰式に出席された同農場の松田智^{ひかる}社長は「うれしい限りです。これからはがんばりたいです」と喜びを語られました。



優秀賞を受賞した多田ファームの松田智社長（左）とJA愛媛たいきの木口武志さん

野菜たっぷりトマト鍋豚しゃぶ

レシピ提供：いのこ家総料理長・林 勝

この冬一番人気の鍋料理といえばトマト鍋。和風であっさりとしつつコクのあるレシピを教えてくださいました。SPFポークはしゃぶしゃぶの要領でさっと火を通していただく方が、やはりおいしさが引き立つようです。

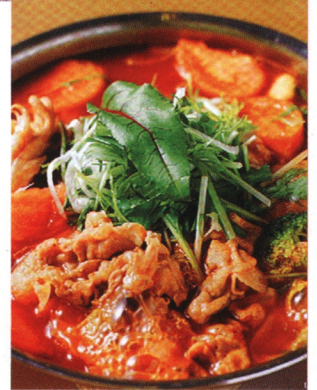
材料（4人前）

SPF豚バラ薄切り肉 600g
レタス 1個、水菜 250g、トマト 1個、
ねぎ 1本、にら 2束、
えのき 1パック、しめじ1パック

<スープ>

水 1,800cc、トマトジュース 360cc、
和風顆粒だし 40g、昆布 10g、キムチの素 30g、
ラード20g、みりん180cc、薄口しょうゆ 180cc
おろしにんにく 少々

パルメザンチーズ 80g、ごはん お好みの量



つくり方

- ① 鍋に水と昆布を入れて火にかけ、沸騰直前に顆粒だしをいれて鰹だしにします。
- ② 薄口しょうゆとみりんを加え、キムチの素を入れます。
- ③ ラードとおろしにんにく、トマトジュースを入れ煮立ったらスープの完成です。
- ④ ③を土鍋に移して火にかけ、きのこ類とレタス以外の野菜を入れ、さらに湯むきしたトマトをくずしながら加え、火を通したら完成です。
- ⑤ お肉とレタスをしゃぶしゃぶしながらいただきます。

【林シェフのひとこと】

鍋の最後はパルメザンチーズとご飯を入れてリゾットにして召し上がってみてください。おいしいですよ。

●認定情報●

●平成21年度認定農場

[12月認定]

(有効期間：平成21年12月10日から22年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション種豚センター、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)中多寄農場、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、神明畜産(株)八戸ファーム、(有)ふなばやし農産第3農場、岩手県・全農岩手県本部種豚センター本場、(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、秋田県・(有)ポークランド、山形県・(有)最上川ファーム、(有)鮭川ピッグファーム、宮城県・(株)しまごき牧場蔵王高原農場、(農)しわひめスワイン、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)山

西牧場、(有)常陸牧場、(有)クロスファーム、(有)澤畑養豚センター、群馬県・(有)長谷井畜産、ピックファームゴカン、千葉県・実川養豚、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、長野県・(有)ヤマイチファーム、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、(有)エム・ピー・エフやなはら、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・(株)北九州ジェイエイ畜産大分SPF豚種豚農場、(株)北九州ジェイエイ畜産大分支社SEW安岐ファーム、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同島原農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業部栗野農場、(株)シムコ阿久根GP (以上46農場)

※次回認定委員会は平成22年3月11日(木)の予定



斉藤SPF農場

斉藤 大和さん

●岩手県北上市

父の農場を受け継ぎ、仕事も家庭も遊びも大事にする若き経営者

岩手県南西部に位置し、東は北上山系、西は奥羽山系を望み、中央には北上川・和賀川を有する自然豊かな環境ながら、県内有数の流通・工業集積地でもある北上市に、今回紹介する斉藤SPF農場があります。

祖父の代に庭先養豚的に始めた養豚業を、30年ほど前、父の故長栄さんが規模拡大し、現在母豚130頭一貫農場となっています。

東京の大学で経営学を学んだ大和さんは、卒業後サラリーマンとしての道を歩んでいましたが、4年前、25歳の時に長栄さんが病床に伏したのを機に、家族の生活を守る責任感から迷う余地もなく農場へ。元々稼業を継ぐ気がなかったため、養豚は全くといっていいほどわからない状態でしたが、農場経営ほとんどを一人で担っていた父に代わるべく、お母さんの助言を受けつつ独学で農場経営・飼養管理を学んだそうです。

豚の管理等実務を習得するのは大変だったろうと思いきや「現場作業よりも主に経営面の習得に時間がかかった」と当時を語ります。今の仕事は「特殊な業種と考えておらず、収入を得るための手段」、経営に関しては「情勢が上向きな時もそうでないときも、気持ちを流されず、やるべきことをきちっとやっておく」という考え。年齢の割にはかなり落ち着いた雰囲気を漂わせています(失礼しました)。

仕事・家庭・遊びに関しては、どれか一つに偏らず、バランスよくこなしてゆくののがモットーだそうです。趣味について聞いてみますと「これといってな〜」と困った様子。では



仕事以外の時間はどんなことを?と質問すると、「今のところは2歳になる息子さんの相手をする時間に一番ウェイトを置いている」とのこと。「自分が子供の時、父が規模拡大の時期だったこともあり忙しく、一緒に過ごした時間が少なかったので、子供には同じ経験はさせたくない」という考え。料理も好きでインターネットなどで美味しそうなものを見つけると、自ら腕をふるい家族に振る舞うことも多々あるとか。世の主婦にとって理想的なマイホームパパではないでしょうか。

時にはゴルフもされますが、地元の友人などとの交流がもっぱらで、プレーもさることながらご自身でクラブを改造することに興味があるなど、独特なこだわりの一面が感じられます。ほかにはTVゲームや読書(マンガ中心)など、今時の若者的な余暇の過ごし方も聞けて少しほっとしました。趣味についての質問に悩んだのは、思い付かないのではなく多彩でそれぞれに思い入れがあり、甲乙付け難かったのかもしれませんが。

説得力のある落ち着いた口調が印象的な大和さん、最後に今後の展望について何うと、数年後に向けていくつかのビジョンはあるそうですが、それはまたの機会に…。((株)シムコ 若菜和美)

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年は6年ぶりの豚価低迷、飼料価格高止まりで、SPF豚農場といえども苦しい年だったと思います。今年も肉豚出荷頭数は多いと予想されます。コストを下げましょう。今号の提言にあるとおり、まず第一に、今使用している薬品の見直しをしましょう。コストダウン効果は大きいと思います。飼料のムダ(餌こぼし、腐敗など)や遊び母豚を徹底的になくしましょう。肉豚の出荷日齢を短縮し、豚舎の回転をよくしましょう。最優秀成績農場で表彰された青木さんのように、やれることはすべてやる。結果はついてくる、と信じましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第38号 2010年1月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 赤池 洋二
編集人 藤田 世秀